

イタリア人神父によるもう一つの「唱歌」

赤井 裕美^a

^a 湘北短期大学保育学科

【抄録】

我が国の保育・幼児教育現場では、唱歌や童謡を用いることが多い。明治後期に文部省が編纂した「尋常小學校唱歌」には、現在まで歌い継がれている曲も含まれている。その歌集は「尋常小學校國語讀本」の韻文を基に作られたものであるが、昭和初期に、イタリア人神父であるヴィンチェンツォ・チマッティが同じ韻文を基に歌曲を作っている。

日本に強い愛着を持っていたチマッティ神父は、積極的に幼児らと関わり、宣教・布教活動を行う中で、「富士山」や「かたつむり」といった日本の唱歌と同じタイトルの歌曲を作り、子どもたちと一緒に歌っては喜ばれ、親近感を持たれていたという。

昨今の保育現場及び保育者養成機関においては、このような史実に触れる機会は多いとは言えない。しかし、こういった事実に関心を持つことは、子どもの教育や保育のあり方を一段と充実したものにし得ると考える。

【キーワード】

子ども向け歌曲 唱歌 ヴィンチェンツォ・チマッティ (Vincenzo Cimatti)

1. はじめに・背景

今日、我が国における子ども向け音楽として、保育・教育現場においても唱歌や童謡が多く使われている。童謡は作曲家・作詞家が明確な歌曲であるが、唱歌は明治以降、文部省により編纂された子ども向け歌曲の総称である。

中でも、明治44年5月から昭和7年3月まで当時の小学生が音楽の教科書として使っていた「尋常小學校唱歌」については、すべて日本人によ

る新作ではあったが、合議制で編纂された為、全120曲についての作者は公開・特定されていない。この「尋常小學校唱歌」に先んじて明治43年7月に発行された「尋常小學校讀本唱歌」もまた、「尋常小學校唱歌」と同じく文部省編纂の教科書であった「尋常小學校國語讀本」の中の韻文教材に曲をつけたものである。そして、この「尋常小學校國語讀本」の中の詩を基に31曲もの歌曲を作った西洋人こそが、本稿で取り上げるヴィンチェンツォ・チマッティ神父(1879 - 1965年)である。

聖職者が作曲家として歴史に名を連ねるケースは稀であり、チマッティ神父の楽曲も現在ではほ

<連絡先>

赤井 裕美 akai@shohoku.ac.jp

とんど知られてはいない。しかし、生前は上記の子ども向け歌曲の楽譜出版や、我が国で最初の日本語による本格的オペラの作曲・公演や、講演を交えた数多くのコンサート活動等により、その名を全国に知らしめていた。

そこで本稿では、我が国への西洋音楽普及に少なからず貢献してきたチマッティ神父の取組みを、「尋常小學唱歌との関わり」という観点から述べていく。尚、本稿を作成するにあたり、サレジオ神学院チマッティ資料館（東京都調布市）の資料を参考にさせて頂いた。ここに謝意を表したい。

2. チマッティ神父の唱歌との関わり

チマッティ神父は、母国イタリアで音楽教師の資格や自然科学・教育学の博士号を取得し、学校の校長や院長になっていたが、大正末期に来日してから86歳で帰天するまでの生涯を、日本におけるサレジオ会の創始と発展の為に捧げた。

チマッティ神父は音楽家としての名声を得ていたが、「『サア、ミナサン、ウタイマショウ！』と孤児たちにかこまれた姿こそ、尊い」と言われていたⁱ。とりわけ子どもに対する愛情は深く、来日当初にチマッティ神父は日本の唱歌と同じタイトルの歌曲を作り、子ども達と一緒に歌ってはその距離を縮めていった。まずはそれまでの経緯をたどる。

<訪日までの略歴>

ヴィンチェンツォ・チマッティは1879年にイタリアのファエンツァに生まれた。生計は非常に厳しかったが、両親は共に豊かな信仰の富を持っていた。父親は彼が2歳の時に他界したが、その一ヶ月余り後の聖ヨハネ・ボスコ（サレジオ会の創立者、ドン・ボスコとしてよく知られている）

との出会いにより、聖職者としての道を歩むこととなった。

またボーイソプラノの美声に恵まれていた彼は、9歳で入学したサレジオ会の学校で友人達と「オカリナのオーケストラ」を作る等、音楽を愛する少年であった。

その後、「音楽はよい気晴らし」と言っていた16歳のチマッティは、頭の中に浮かんだメロディーを授業中の教科書にメモしながら作曲をしていたというⁱⁱ。高等学校を経てトリノ大学では、1903年と1907年に農学・哲学の博士号をそれぞれ取得しているが、先んじて1900年にパルマ国立音楽大学院でコーラスのマエストロのディプロマ（免許状）を取得している。サレジオ会の下級生に対しては国語、ラテン語、数学、化学、物理、農学、教育学までも教える多忙な神学生であったが、特に生活指導や音楽の授業を一任されていたというⁱⁱⁱ。

1905年に司祭に叙階され「チマッティ神父」となった頃にも、数多くの作曲をしている。教育者、宣教師であった彼にとって、「音楽」はその使命を果たす為の手段となっていた。当時、教会学校にいた子どもたちは、「一階にピアノがあり、神父様がその前に座って弾いたり、歌ったりすれば、ぼくたちも一緒に歌って幸せな気分だった^{iv}」と述懐している。

1923年、バチカンの教皇庁より当時のサレジオ会総長へ日本の宣教地の一部（宮崎県と大分県）引き受けの打診があった。母の帰天を見届け、サレジオ会の為に尽くす決意を新たにしていたチマッティ神父が、ちょうど同時期にリナルディ・フィリボ総長に送った「お願いします。私のために一番貧しい、配慮されていない宣教地を探してください」との手紙がきっかけとなり^v、1925年、チマッティ神父は日本への宣教団の団長に任命された。46歳のチマッティ神父は教え子に宛て、次

のように書いている。

これから新しい考え、新しい志
……。日の出ずる国、桜の花、菊の
花、びわ、柿、米、蚊、火山、地震
……。素晴らしい自然の宝庫。喜び
の涙が出る！（中略）私は、東洋に
向けて、すべてを方向転換する。多
くの笑いや喜びがあるだろう。苦し
みも多くあるだろう^{vi}。

<音楽家としてのチマッティ神父>

前述の経緯で来日したチマッティ神父の音楽活動に目を向ける。

すでにイタリア国内でもその活動において知られる存在ではあったが、日本に渡ってからはさらに盛んな音楽活動を行っていたチマッティ神父について、「信徒たちと親しくなるような機会があると音楽を披露し、まだ音楽鑑賞になれていない信徒も喜ばせようと、チマッティ神父は奇妙なやり方でピアノを弾いて皆の心をひきつけるのだった^{vii}」とある。

コンサート活動に関しては、1926年9月17日にフランシスコ会から依頼され鹿児島で行った「ピアノ、ハーモニウム、歌の大音楽会」を皮切りに日本全国、及び満州、北朝鮮、韓国で行い、70歳代後半に至るまで、述べ2千回ものコンサートを開催したという。自身は美声のバリトンとピアノで観客を魅了していたが、特にテノールのマルジャリア神父とのコンビによって開かれた数多くのコンサートは好評を博していた。その音楽活動に対し、「彼ほど大幅に、効果的に音楽を福音宣教に役立たせた例が他にないと断言できる^{viii}」と言わしめている。

また、自作曲は900曲以上残したチマッティ神父であるが、日本で最初の日本語による本格的オ

ペラ（ミュージック・ドラマ）である「細川ガラシア」を作曲したという功績はあまり知られてはいない。このオペラは1940年（昭和15年）1月に日比谷公会堂で初演され、歌舞伎座のメンバーが主役を飾った^{ix}。

他にも45の歌劇、17のミサ曲、多くの合唱曲や賛美歌などを作曲していたチマッティ神父の日本での最初期の作品が、今回取り上げる「尋常小學校國語讀本」によって作られた子ども向け歌曲である。同じく「讀本」の詩を基に日本で作曲され、歌われていた「尋常小學校唱歌」とは全く違うアプローチで曲が作られていることが窺える。それらの楽曲からは、西洋人の目と耳から感じ取った当時の日本を垣間見ることができ、興味深い。

3. チマッティ神父の「尋常小學校國語讀本」の詩による歌曲

本項では、チマッティ神父が上記の子ども向け歌曲を作ったきっかけについて述べる。

1926年（大正15年）2月に来日した9人のサレジオ会員は、カトリック宮崎教会でおよそ一年かけて尋常小學校の「國語讀本」全12巻を用い、日本語を勉強した。「午前中は読み書き。午後は会話と暗記のための書き取り^x」をし、同年3月5日付の手紙の中ですでに「今、作曲したかわいい童謡や、他の歌をいろいろ集めているところです^{xi}」と報告している。チマッティ神父が、教科書十二巻すべてを習得し、それらの詩を基に作った歌曲は31曲存在する。「私は日本語を小学生用の讀本で勉強したのだがその際、詩が出てくると気晴らしを兼ね、さらにまた教会に来る子どもたちに歌わせるつもりでそれに曲を付した。試してみてもひじょうに気に入られたのを見て、さらに続けた^{xii}」とあるように、出来上がった歌曲を、同じ教科書を使っていた子ども達に教えていた。詩

を口ずさんでみて、それが「覚えやすいことがわかると、すぐに、ページの縁に5線を引いて音譜を付けてみた^{xiii}」のだという。コンサートの際も、クラシック曲の中に童謡を交えることも多く、客席前列に子どもが多い際は、観客の許可を得て第二部を子ども向けの内容に変更していたという。居合わせた観客は次のように語っている。

チマッティ神父は、軽業師のようにピアノで遊んだ。ピアノに背を向けて弾いたり、子どもに目隠ししてもらって弾いたり、ひじを使って弾いたり、鼻までも鍵盤に打って弾いたりもした。子どもたちにとって、この上ない喜びだった。これが、チマッティ神父にとっても最高の報償だった^{xvi}。

また同僚のマルジャリア神父は、布教の為に日本各地で意欲的に開いていた音楽会の中で「いちばん、聴衆の関心を集めたものは、彼自身が作曲した歌などです。その中には優しくかわいらしいものもあれば、壮重な響きをもつむずかしいものもありました^{xv}」と述べている。

そして、チマッティ神父は1928年3月8日に総長へ宛てた手紙で「時間があつたら、以前から夢見てきた計画を神様のお恵みで実現したいと思い、今まで作曲した尋常小学校の教科書の歌を仕上げ、使節閣下をとおして日本の教育界に紹介したいと思います^{xvi}」と書いているが、それからまもなく実現することとなる。

1929年（昭和4年）、「うたへやうたへ！」という2冊の童謡集が大分のドン・ボスコ和洋楽友社により、第1集は2月20日、第2集は5月1日に出版された。日本各地で歌われるきっかけとなったこの件について、母国イタリアの副総長で

あつたりカルドーネ・ピエトロ神父宛てに同年2月28日付で報告しているの、下に引用しておく。

私が喜びに溢れていることを示すために、『うたへやうたへ』という、私たちの日本語の『Su cantiam』をお送りします。この本がためになるだけでなく、また多くの道を開いてくれると期待しています。歌詞は尋常小学校の教科書のもので、舞台上で、「歌手」や「博士」である私たちがこれらを披露し、日本人に大きな感激を与えました。見てご覧なさい。神父様が来られたとき「偉い人」と呼ばれましたが、私は「チマチ神父」と呼ばれていますよ！（私の名前は日本語で、こう誤って発音されています！）もちろん、この本は私の作曲です。巻末に日本人の大好きなハーモニカの伴奏も付いています^{xvii}。

特に、教会やコンサートで頻繁に披露されていた「尋常小學國語讀本」からの2曲、「うちの子ねこ」と「富士の山」は、後の1937年5月にレコード収録され、ドン・ボスコ社から発売された。良き相棒であったマルジャリア神父が歌うこの録音のチマッティ神父自身による伴奏からは、ダイナミック且つ多彩な表現力を持つピアノテクニックが窺える。

<「尋常小學國語讀本」の詩を基に作られたチマッティ楽曲と「尋常小學唱歌」>

この項では、「尋常小學國語讀本」の詩から作られたチマッティ神父による楽曲と同一の詩を基

イタリア人神父によるもう一つの「唱歌」

に作られた「尋常小學唱歌」について、表にまとめる。

図表 1

《旧版の「尋常小學唱歌」(明治44年刊)に掲載されている楽曲》

*太字は「尋常小學國語讀本」の同じ詩によりチマッティ神父も作曲している楽曲。

尚、() は旧版にはあるが、新訂版ではカットされた楽曲。

「尋常小學讀本唱歌」以来の楽曲	
第1学年用	朝顔 烏 紙鳶の歌
第2学年用	小馬 蛙と蜘蛛 富士山 時計の歌 母の心
第3学年用	春が来た 虫の声 日本の国 かぞえ歌
第4学年用	いなかの四季 たけがり 近江八景 何事も精神 (家の紋)
第5学年用	舞えや歌えや 水師營の会見 三才女
第6学年用	我は海の子 出征兵士 鎌倉 卒業の歌 (同胞ここに六千万) (国産の歌)

旧版の「尋常小學唱歌」(明治44年刊)に新たに加えられた楽曲

第1学年用	日の丸の旗 鳩 おきやがりこぼし人形 ひよこ 砂遊び かたつむり 牛若丸 夕立 桃太郎 池の鯉 親の恩 菊の花 月 木の葉 兎 犬 花咲翁
第2学年用	桜 二宮金次郎 雲雀 田植雨 蟬 浦島太郎 案山子 紅葉 雪 梅に鶯 那須与一 (よく学びよく遊べ) (仁田四郎) (天皇陛下)
第3学年用	かがやく光 茶摘 青葉 汽車 虹 村祭 鴨越 雁がわたる 取り入れ 豊臣秀吉 冬の夜 川中島 (友だち) (皇后陛下) (おもいやり) (港)
第4学年用	春の小川 靖国神社 蚕 藤の花 曾我兄弟 雲 漁船 広瀬中佐 霜 八幡太郎 村の鍛冶屋 雪合戦 橋中佐 (桜井のわかれ) (つとめてやまず)
第5学年用	みがかずば 金剛石・水は器 八岐の大蛇 鯉のぼり 菅公 忍耐朝日は昇りぬ 日光山 海 納涼加藤清正 鳥と花 大塔宮 入宮を送る 冬景色 卒業生を送る歌 (運動会の歌) (斎藤実盛〈6年生用へ〉)
第6学年用	明治天皇御製 朧月夜 四季の雨 日本海海戦 蓮池 故郷 秋 灯台 天照大神 夜の梅 (開校記念日) (新年) (児島高德〈5年生用へ〉)

図表 2

《「新訂尋常小學唱歌」(昭和7年刊)に新たに加えられた楽曲》

*太字は「尋常小學國語讀本」の同じ詩によりチマッティ神父も作曲している楽曲

第1学年用	兵隊さん 電車ごっこ 僕の弟 一番星 みつけた つみ木 雪達磨
第2学年用	ラジオ 折紙 竹の子 金魚 こだま ポプラ かけっこ がん 影法師 うちの子ねこ
第3学年用	摘草 木の芽 蛭 燕 夏休 波 噴水 赤とんぼ ままき 飛行機 私のうち
第4学年用	かげろう 五月 動物園 お手玉 夢 夏の月 牧場の朝 水車 山雀 餅つき
第5学年用	朝の歌 山に登りて 風鈴 秋の山 いちょう 児島高德 進水式 雛祭
第6学年用	遠足 我等の村 瀬戸内海 日本三景 風 森の歌 滝 鶯 霧 鳴門 雪 スキーの歌 斎藤実盛

<「尋常小學唱歌」とチマッティ楽曲との詩の使われ方の比較>

上記のように、同じ詩を題材にして作られていたのは全15曲である。この項では「尋常小學國語讀本」の韻文を発行順に記載し、それを基に作られた「尋常小學唱歌」とチマッティ神父の楽曲の歌詞を比較した上で、各曲の主な特徴についても簡潔に触れておく。尚、「國語讀本」の韻文の漢字は一部現代表記としている。チマッティ神父による歌詞については、彼自身は楽譜にはローマ字表記をしているのだが、チマッティ神父ないしは書き取った協力者(おそらく同僚神父)による手書き譜の原文通りに記入した。

また、表について、上の囲みは「尋常小學國語讀本」、左下の囲みは「尋常小學唱歌」(尋)、右下の囲みはチマッティ神父による楽曲(チ)としている。

【かたつむり】

タイトルなし (デンデンムシムシ)	
デンデンムシムシ カタツムリ、 アタマ ガ アル カ、メ ガ アル カ。 ツノ ダセ、ヤリ ダセ、アタマ ダセ。 (尋常小 国語讀本 卷一 文部省 (P.21))	
(第1学年用) 九、かたつむり	デンデンムシムシ
一、 でんでん蟲 かたつむり、 お前のあたまは どこにある。 角だせ、槍だせ、あたま出せ。	デンデンムシムシ カタツムリ カタツムリ アタマガ アルカ メガ アル カ ツノダセ ヤリダセ メダマダ セ
二、 でんでん蟲 かたつむり、 お前のめだまは どこにある。 角だせ、槍だせ、めだま出せ。	

尋) 二長調、日本人の誰もが知る唱歌の一つ。
チ) 二長調、Allegretto、「1929」とあり。明るく軽快な楽曲。

【菊の花】

三 キク ノ ハナ	
ミゴトニ サイト カキネ ノ コギク、 一ツ トリタイ、キイロナ ハナ ラ、 ハイタイアソビ ノ クンシヤウ ニ	
ミゴトニ サイト カキネ ノ コギク、 一ツ トリタイ、マツシロナ ハナ ラ、 ママゴトアソビ ノ ゴチソウ ニ (尋常小 国語讀本 卷二 文部省 (P.9))	
(第1学年用) 一九、菊の花	きくの花
一、 見事に咲いた かきねの小菊、 一つ取りたい、黄色な花を、 兵隊遊の勲章に。	みごとに さいた かきねのこ ぎく ひとつとりたい きいろなはな を へいたいあそびの くんしょう に
二、 見事に咲いた 垣根の小菊、 一つ取りたい、眞白な花を、 飯事遊の御馳走に。	

*先に散文の部分があるが、ここでは歌詞として使われた韻文のみを掲載する。
尋) ト長調、シンプルな楽曲。
チ) ヘ長調、Cantabile moderato。2声部を持つ3拍子系で落ち着いた雰囲気のある楽曲。

【木の葉】

十 木 ノ ハ	
ドコ カラ キタ ノ カ、トンデ キタ 木 ノ ハ、 クルクル マハツテ、クモ ノ ス ニ カカリ、 カゼ ニ フカレテ、ヒラヒラスレバ、 クモ ハ ムシ カ ト ヨツテ クル。	
ドコ カラ キタ ノ カ、トンデ キタ 木 ノ ハ、 ヒラヒラ マツテ キテ、イケ ノ 上 ニ オチテ、 ナミ ニ ユラレテ、ユラユラスレバ、 コヒ ハ エサ カ ト ウイテ クル。 (尋常小 国語讀本 卷二 文部省 (P.22))	

(第1学年用) 二一、木の葉	木の葉
一、 何処から来たのか、飛んで来た木の葉、 くるくるまはって、蜘蛛の巣にかかり、 風に吹かれて、ひらひらすれば、 蜘蛛は蟲かと寄つて来る。	どこからきたのか とんできた このは くるくるくるくるまわって くものすにかかり かぜにふかれて ひらひらひら ひらすれば くもはむしかと よってくる
二、 何処から来たのか、飛んで来た木の葉、 ひらひら舞つて来て、池の上におちて、 波にゆられて、ゆらゆらすれば、 鯉は餌かと浮いて来る。	どこからきたのか とんできた このは ひらひらひらひらまってきた いけのうえにおちた なみにゆられて ゆらゆらゆら ゆらすれば こいはえさかとういてくる

尋) 二長調、軽快な楽曲。
チ) 二短調、Moderato assai。擬音の繰り返しは軽やかさを感じさせるが、珍しく短調の楽曲。

【飛行機】

二十四 ヒカウキ	
アレアレ アガル、ヒカウキ ガ。 大キナ トビ ガ、トブ ヤウ ダ。 ズンズン アガル、クモ ノ 上。 ノツテ ミタイ ナ ヒカウキ ニ。	
アレアレ アンナニ ヒカウキ ガ。 小サナ トンボ ガ トブ ヤウ ダ。 ダンダン チカヨル オ日サマ ニ。 アンナニ トンダラ ユクワイダラウ。 (尋常小 国語讀本 卷二 文部省 (P.69))	
(第3学年用) 二二、飛行機	ひこうき
一、 とんぼのやうに軽うかんで、 高い青空ま一文字に かける飛行機、見よ、あのすがた。	1. あれあれ あがるひこうきが おおきなとびがとぶようだ ずんずんあがるくものう のつてみたいひこうきに
二、 鳶のやうにつばさをはつて、 広い大空我が物顔に うなる飛行機、聞け、あのひびき。	2. あれあれあんなにひこうきが ちいさなとんぼがとぶようだ だんだんちかよるおひさまに あんなにとんだらゆかいだらう
三、 町・村見下ろし、山・谷越えて、 雲をぬひつつまたたく中に かすむ飛行機、あれ、あの早さ。	

尋) イ長調、唱歌の中では珍しい調性、拍子も3拍子系と珍しい。特に後半はフレーズ間の隙間がなく、プレス(息継ぎ)がやや難しく感じる。
チ) 2種類の楽譜が残されている。どちらもハ長調。1曲目と見られる方(通し番号626)は2声部で進み、下降形で終わるのに対し、「Moderato」とある楽曲(通し番号627)も2声部で進むが、上行形を重ね、より開放的な印象を与えている。

イタリア人神父によるもう一つの「唱歌」

【富士山】

二十五 ふじ の 山	
あたまを雲の上に出し、四方の山を見おろして、 かみなりさまを下にきく、ふじは日本一の山。 青空高くそびえたち、からだにゆきの着物着て、 かすみのすそを速くひく、ふじは日本一の山。 (尋常小學 國語讀本 卷三 文部省 (P.80))	
(第2学年用) 一九、富士山 一、 あたまを雲の上に出し、 四方の山を見おろして、 かみなりさまを下に聞く、 富士は日本一の山。 二、 青空高くそびえ立ち、 からだに雪の着物着て、 霞のすそを速く曳く、 富士は日本一の山。	富士の山 1. あたまをくものうえにだし しほうのやまを見おろして かみなりさまを かみなりさま を したにきく ふじはにっぽんいちのやま 2. あおぞらたかくそびえたち からだにゆきのきものきて かすみのすそを かすみのすそ を とおくひく ふじはにっぽんいちのやま

尋) 二長調、現在まで広く歌われ続けている唱歌の一つ。
 チ) 変ホ長調、Maestoso。前奏から卅の多用、3連符の上行形で盛り上がりを見せ、高音(G音)のフェルマータで旋律を締めくくる。両手伴奏が充実した楽曲。
 コンサートで組むことが多かったマルジャリア神父によると、当時この曲が演奏会で披露された際の様子を次のように述べている。「師の作曲でひじょうに好評を博したもう一つに、“富士山”と言うのがあります。最後の小節がすこぶる高く、霊峰にふさわしい感じがうまく表されていました。チマッチ神父は演奏中その箇所になるときまって立ち上がり、片手でピアノを叩きながら、もう一方の手を上にあげ山の高さを身振りで示すのです。聴衆はあたかも特別の力にひかれたように一斉に立ち上がり、拍手を浴びせました。^{xviii}」

【うちの子ねこ】

四 うち の 子ねこ	
うちの子ねこは かはいい子ねこ、 くびのこすずを ちりちり ならし、 すそに からまり、 たもとに すがる。 うちの子ねこは かはいい子ねこ、 くびのこすずを ちりちり ならし、 まりとざれては えんから おちる。 (尋常小學 國語讀本 卷三 文部省 (P.10))	

(第2学年用) 二三、うちの子ねこ 一、 うちの子ねこは かはいい子ねこ、 くびのこすずを ちりちりならし、 すそにからまり、たもとにすがる。 二、 うちの子ねこは かはいい子ねこ、 くびのこすずを ちりちりならし、 まりとじやれては えんからおちる	うちの子ねこ うちの子ねこは かはいい子ねこ くびのこすずを ちりちりちりちり ちりちり ならし すそにからまりたもとにすがる うちの子ねこは かはいい子ねこ まりとざれては えんからおちる うちの子ねこは かはいい子ねこ くびのこすずを ちりちりちりちり ちりちり ならし
---	--

尋) へ長調、細かな動きが出てくる可愛らしい楽曲。
 チ) へ長調、Allegretto moder. 「1929」とあり。擬音の繰り返しが楽しい楽曲。

【春が来た】

二十三 春 が 来た	
春が来た、春が来た、どこに来た。 山に来た、里に来た、野にも来た。 花がさく、花がさく、どこにさく。 山にさく、里にさく、野にもさく。 鳥が鳴く、鳥が鳴く、どこで鳴く。 山で鳴く、里で鳴く、野でも鳴く。 (尋常小學 國語讀本 卷四 文部省 (P.88))	
(第3学年用) 一、春が来た 一、 春が来た、春が来た、どこに来た。 山に来た、里に来た、野にも来た。 二、 花が咲く、花が咲く、どこに咲く。 山に咲く、里に咲く、野にも咲く。 三、 鳥が鳴く、鳥が鳴く、どこで鳴く。 山で鳴く、里で鳴く、野でも鳴く。	春が来た 1. はるがきた はるがきた どこ にきた やまにきた さとにきた のに もきた のにもきた 2. はながさく はながさく どこ にさく やまにさく さとにさく のに もさく のにもさく 3. とりがなく とりがなく どこ でなく どこでなく やまでなく さとでなく ので もなく のでもなく

尋) へ長調、日本人の誰もが知っているであろう、現在まで広く歌われている唱歌の一つ。
 チ) 二長調、Andantino。明るく軽やかな雰囲気のある楽曲。2種類の楽譜があるが、一方はメロディーのみで、「1929」とある方(通し番号689)には伴奏形の他に、メロディーも2声部に分かれ、裝飾音(前打音)も増えるなど、工夫が凝らされている。

[麦まき]

四 麦まき

なら や くぬぎの は は 黄 に そまり、
 廣い たんぼ に 北風 あれる。
 風 に 吹かれて、 なま土 ふんで、
 今日 も 朝 から せい 出す おや子。

おや は かへして、 子 は くれ うつて、
 廣い たんぼ の 麦まき すます。
 「やつと すんだ。」 と 見上げる 空 に、
 あす も 天気 か、 夕日 が 赤い。
 尋常小學 國語讀本 卷四 文部省 (P.9)

<p>(第3学年用) 二〇、麦まき</p> <p>一、 ならやくぬぎの葉は黄にそまり、 廣いたんぼに北風あれる。 風に吹かれて、なま土ふんで、 今日も朝からせい出すおや子。</p> <p>二、 おやは返して、子はくれうつて、 廣いたんぼの麦まきすます。 「やつとすんだ。」と見上げる空 に、 あすも天気か、夕日が赤い。</p>	<p>むぎまき</p> <p>1. ならやくぬぎの ははきにそまり ひろいたんぼにきたかぜはれる かぜにふかれて なまつちふんで きょうもあさからせいだすおやこ</p> <p>2. おやはかえして こはくれうつて ひろいたんぼのむぎまきすます やつとすんだとみあげるそらに あすもてんきかゆうひがあかい</p>
--	---

尋) へ長調、シンプルな楽曲。
 チ) へ長調、Largo Cantabile。フレーズの区切り方や16分音符を使ったリズムにより、生き生きとした雰囲気を感じられる楽曲となっている。

[虹]

十七 虹

あれあれ、虹が立つてある。
 森も小山も下に見て、向ふの田から大空の
 雲までとどく弓のなり。
 だれがかけたか、虹の橋。

さてさて、虹は美しい。
 赤黄みどりやむらさきと、七つの色をならばせて、
 空のえぎぬへ一筆に、
 だれがかいたか、虹の橋。

さてさて、虹はおもしろい。
 雨のはれ間にちよつと出て、用ありさうに天と地の
 遠きをつなぐ雲の上。
 だれが渡るか、虹の橋。
 あれあれ、虹がきえて行く。
 あのあざやかな色どりも
 しだいしだいにうすくなり、
 小山の方はもう見えぬ。
 だれがけすのか、虹の橋。
 (尋常小學 國語讀本 卷五 文部省 (P.60))

<p>(第3学年用) 一〇、虹</p> <p>一、 虹が出た、虹が出た。 空を衣装に見立てたら、 七つの色に染分けた だんだら模様、はで模様。</p> <p>二、 虹が出た、虹が出た。 空を一面水と見て、 珊瑚や瑠璃をちりばめた 天女の橋よ、玉の橋。</p>	<p>虹</p> <p>1. あれ！あれ！にじがたっている もりもこやまもしたにみて むこうの田からおおぞらの</p> <p>くもまでとどくゆみのなり だれがかけたか にじのはし だれがかけたか にじのはし</p> <p>2. さて！さて！にじはうつくしい あかきみどりがむらさきと ななつのいろをならばせて そらのえぎぬへひとふでに だれがかいたか にじのはし だれがかいたか にじのはし</p> <p>さて！さて！虹がおもしろい あめのはれまにちよつとでて ようありそうにてんとちの とおきをつなぐものうえ だれがわたるか にじのはし だれがわたるか にじのはし</p> <p>あれ！あれ！にじがきえて行く あのあざやかないろどりも しだいしだいにうすくなり こやまのほうはもうみえぬ だれがけすのか にじのはし</p>
---	---

尋) へ長調、シンプルな楽曲だが、曲後半では付点のリズムや高音を用い、盛り上がりを見せる。
 チ) 変ホ長調→変ホ短調→変ホ長調→ト長調、Moderato。
 きわめて工夫が見られる歌曲となっている。箇所により Coro (合唱)、Solo (独唱) と書かれており、調とともに、拍子も3拍子系、4拍子系と交互にあらわれ、情景が移ろう様子を感じさせる。また、両手伴奏も充実した楽曲である。
 この曲に関して、チマッティ神父は1926年7月27日付でイタリアの神父仲間へ宛てた手紙で触れている。「次の歌を聞いてください。そして、私のフランコ君、もしできるなら、弾いてみてください。(楽譜記載) この言葉をよく黙想してみれば、虹の現象がよく目の前に現れ出てきます。また、言葉を分析してみれば、日本人の魂も観えてくるでしょう。不動で、平然と、心の中のことを少しも表に出さず、それでも考えはするし、問いもする。」³¹³⁾

イタリア人神父によるもう一つの「唱歌」

[私のうち]

九 私のうち	
二 もえる木のめに春風吹けば、うちのまはりのうめ・もも・さくら、 かはるがはる花さきみだれ、人も来て見る、小鳥もうたふ。 うちの前には小川が流れ、舟もうかべば、あひるもうかぶ。 つりも出来るし、およぎも出来て、あつい夏でもすすじくらす。 つゆや時雨がいろよくそめたうらの小山に秋風吹けば、木々のし づくもきのことなつて、ばんのごはんのおかずまじる。 松をのこして木の葉がちれば、庭は一日日がよくあたる。 本のおさらひすました後は枝につるしたぶらんこ遊。	
(尋常小學 國語讀本 卷五 文部省 (P.27))	

(第3学年用) 二六、私のうち	わたくしのうち
一、 もえる木のめに春風吹けば、 うちのまはりの梅・桃・櫻、 かはるがはるに花咲きみだれ、 人も来て見る、小鳥もうたふ。 二、 うちの前には小川が流れ、 舟もうかべば、あひるもうかぶ。 つりも出来るし、およぎも出来 て、 あつい夏でもすすじくらす。 三、 つゆや時雨が色よくそめた うらの小山に秋風吹けば、 木木の雫もきのことなつて、 ばんの御飯のおかずまじる。 四、 松をのこして木の葉がちれば、 庭は一日日がよくあたる。 本のおさらひすました後は、 枝につるしたぶらんこ遊。	もえるきのめに はるかぜふけ ば うちのまわりのうめももさくら かわるがわるにはなさきみだれ ひとつもきてみる ことりもうた う

*「一」と「三」に関しては韻文ではなく散文である為、歌詞として使われた「二」の部分のみ掲載する。
尋) へ長調、4 番までである。3 拍子系の楽曲は唱歌の中では珍しい。
チ) 二短調、Moderato narrando とある。
narrando はポルトガル語であるが、イタリア語で言うところの narrante (語るように) の意味と思われる。フレーズの区切り方からも丁寧な表情が求められる楽曲となっている。

[冬の夜]

第十四 冬の夜	
ともし火近く 衣 (きぬ) ぬふ母は 春の遊の 楽しさかたる。 居ならぶ子どもは、指を折りつつ、日數かぞへて、喜び勇む。 ゑろり火ははとろとろ、外は吹雪。 ゑろりのはたに縄なふ父は すぎしいくさの手がらを語る。 居ならぶ子どもはねむさ忘れて、耳をかたむけ、こぶしをにぎる。 ゑろり火ははとろとろ、外は吹雪。 (尋常小學 國語讀本 卷六 文部省 (P.49))	

(第3学年用) 二四、冬の夜	冬の夜
一、 燈火ちかく衣縫ふ母は 春の遊の楽しさ語る。 居並ぶ子どもは指を折りつつ、 日數かぞへて喜び勇む。 囲炉裏火ははとろとろ、外は吹雪。 二、 囲炉裏のはたに縄なふ父は 過ぎしいくさの手柄を語る。 居並ぶ子どもはねむさ忘れて、 耳を傾け、こぶしを握る。 囲炉裏火ははとろとろ、外は吹雪。	ともしびちかく きぬぬうははは はるのあそびの たのしきかたる いならぶこどもは、ゆびをおりつつ ひかずかぞえて よろこびいさむ いろりははとろとろ そとはふぶき いろりははとろとろ そとはふぶき

尋) ト長調、曲尾の「囲炉裏火ははとろとろ 外は吹雪」の部分が生々しい作りとなっているのが特徴的。
チ) へ長調、Lento Cantabile。曲尾の「いろり火ははとろとろ 外は吹雪」の箇所が繰り返される形となっている(自筆譜には「いろり火は」とあるが、ミスと思われる)。

[廣瀬中佐]

第二十四 廣瀬中佐	
とどろく砲音、飛來る彈丸 (だんぐわん)。荒波洗ふデッキの上に、 やみをつらぬく中佐の叫。 「杉野はいづこ、杉野は居ずや。」 船内くまなくたづねる三度、呼べど答へず、さがせど見えず、船 は次第に波間に沈み、敵弾いよいよあたりにしげし。 今はとボードにうつれる中佐、飛來る彈丸 (たま) に忽ちうせて、 旅順港外うらみぞ深き、軍神廣瀬と其の名残れど。 (尋常小學 國語讀本 卷八 文部省 (P.97))	

(第4学年用) 一七、廣瀬中佐	広瀬中佐
一、 轟く砲音、飛來る彈丸。 荒波洗ふデッキの上に、 闇を貫く中佐の叫。 「杉野は何処、杉野は居ずや。」 二、 船内隈なく尋ねる三度、 呼べど答へず、さがせど見えず。 船は次第に波間に沈み、 敵弾いよいよあたりに繁し。 三、 今はとボードにうつれる中佐、 飛來る彈丸に忽ちうせて、 旅順港外恨ぞ深き、 軍神廣瀬と其の名残れど。	1. とどろくつつおと とびくるだんがらん あらなみあらう デッキのうえに やみをつらぬく ちゆうさのさげび すぎのはいずこ すぎのはいずや! 2. せんないくまなく たづねるみたび よべどこたえず さがせどみえず ふねはしだいに なみまにしずみ てきだんいよいよ あたりにしげし 3. いまはとボードに うつれるちゆうさ とびくるたまに たちまちうせて りよじゅんこうがい うらみぞふかし ぐんしんひろせと そのなのこれど。

尋) ト長調、長調で英雄を讃えるような堂々とした曲調。そういった意味ではいかにも「唱歌」らしい。
チ) ホ短調 → ト長調 → ホ長調 → ホ短調 → ホ長調、Andante maestoso。両手伴奏で重々しく進んでいくが、途中で転調していく。特に、2 番全体と 3 番の曲尾はホ長調になり、誇り高い雰囲気を出す。

【明治天皇御製】

第一課 明治天皇御製

古のふみ見るたびに思ふかな、おのが治むる國はいかにと。
 浅緑すみわたりにたる大空の ひろきをおのが心ともがな。
 大空にそびえて見ゆるたかねにも、のぼればのぼる道はありけり。
 ほどほどに心を盡くす國民の ちからぞやがてわが力なる。
 さし昇る朝日の如く、さわやかに もたまほしきは心なりけり。
 よきを取りあしきを捨てて、とつ國に
 おとらぬ國となすよしもがな。
 荒駒を馴らしがてらに、野邊遠く、
 櫻がりするますらのとも。
 いづ方に志してか、日盛りの
 やけたる道を蟻の行くらむ。
 はるばると風のゆくへの見ゆるかな、
 すずきがはらの秋の夜の月。
 海原はみどりに晴れて濱松の
 こずゑさやかにふれる白雪。
 (尋常小學 國語讀本 卷十二 文部省 (P.79))

<p>(第6学年用) 一、明治天皇御製 一、 物學ふ道にたつ子よ、 おこたりに、まされる仇はなし としらなむ。 二、 さし昇る朝日の如く、 さわやかにもたまほしきは心 なりけり 三、 おのが身はかへりみずして人の ため、 盡すぞ人の務なりける。</p>	<p>いにしへのふみみるたびに(明 治天皇御製) いにしへのふみみるたびにおも ふかな おのがおさむるくにはいかにと ほどほどにころをつくすくに たみを ちからぞやがてわがちからなる けり さしのぼる あさひのごとく さはやかに もたまほしきは さしのぼる あさひのごとく ころなりけり</p>
--	--

尋) ト長調、落ち着いた雰囲気のある楽曲。
 チ) ニ短調→ニ長調→ハ長調→ヘ長調、「1928」とある。「君が代」のフレーズが伴奏の随所にあらわれる。盛り上がりを見せる部分では声部が分かれてカノンになるなど、高度な歌曲となっている。また、両手伴奏はアルペジオの音型やトレモロなどを用いて華やかで、前奏、間奏と、特に後奏が充実している。

【遠足】

第四課 遠足

一、
 鳴くやひばりの聲うらかに、かげろふもえて野は晴れわたる。
 いざや、我が友うち連れ行かん。今日はうれしき遠足の日よ。
 二、
 右に見ゆるは名高き御寺、左に遠くかすむは古城、春は繪のごと
 我等をめぐる。
 今日のはたのしき遠足の日よ。
 三、
 たどりつきたる峠の上に、菜の花にほふ里見下して、笑ひさざめ
 くひるげのむしろ。
 今日のはうれしき遠足の日よ、
 四、
 風は音なくやなぎをわたり、船は静かに我等をのせて、行くは何
 処ぞ、桃さく村へ。
 今日のはたのしき遠足の日よ。
 (尋常小學 國語讀本 卷十一 文部省 (P.11))

<p>(第6学年用) 三、遠足 一、 鳴くやひばりの聲うらかに、 かげろふもえて野は晴れわたる。 いざや、我が友うち連れ行かん。 今日のはうれしき遠足の日よ。 二、 右に見ゆるは名高き御寺、 左に遠くかすむは古城、 春は繪のごと我等をめぐる。 今日のはたのしき遠足の日よ。 三、 たどりつきたる峠の上に、 菜の花にほふ里見下して、 笑ひさざめくひるげのむしろ。 今日のはうれしき遠足の日よ。 四、 風は音なくやなぎをわたり、 船は静かに我等をのせて、 行くは何処ぞ、桃さく村へ。 今日のはたのしき遠足の日よ。</p>	<p>遠足 1. なくはひばりのこえうらかに かげろふもえてのははれわたる いざやわがともうちつれゆか ん! きょうはうれしきえんそくのひ よ! 2. かぜはおとなくやなぎをわたり ふねはしづかにわれらをのせて ゆくはいづこぞももさくむら へ! きょうはたのしきえんそくのひ よ! かぜはおとなく ふねはしづかに ゆくはいづこぞ!ももさくむら へ! かぜはおとなく ふねはしづかに ゆくはいづこぞ!ももさくむら へ! ももさくむらへ きょうはたのしきえんそくのひ よ!</p>
--	---

尋) 変ホ長調、4番まであり、雄大な雰囲気を感じられる楽曲。
 チ) 2種類の楽譜が残されているが、1作目(通し番号673、曲名「遠足のうた」)は4番まであるものの推敲途中のものと思われる。2作目(通し番号751)の方は、ヘ長調→ヘ短調→ハ短調→ヘ長調、Lento leggieroとある。一時的な調の変化もあり、発想標語も珍しいものを用いている。両手伴奏は和音を多用し、深みを感じられる。

【我は海の子】

第十九課 我は海の子

(一)
 我は海の子、白波の
 さわぐいそべの松原に、煙たなびくとまやこそ、
 我がなつかしき住家なれ。
 (二)
 生れて潮に浴して、浪を子守の歌と聞き、
 千里寄せくる海の氣を 吸ひてわらべとなりけり。
 (三)
 高く鼻つくいその香に、不斷の鼻のかをりあり。
 なぎさの松に吹く風を、いみじき樂と我は聞く。
 (四)
 丈餘のろかい操りて、行手定めぬ浪まくら、
 百尋・千尋海の底、遊びなれたる庭廣し。
 (五)
 幾年ここにきたへたる 鐵より堅き腕あり。
 吹く潮風に黒みたる はだは赤銅さながらに。
 (六)
 浪にただよふ永山も、來らば來れ、恐れんや。
 海まき上ぐるたつまきも、起らば起れ、驚かじ。
 (七)
 いで、大船を乗出して、我は拾はん、海の富。
 いで、軍艦に乗組みて、我は護らん、海の國
 (尋常小學 國語讀本 卷十一 文部省 (P.79))

イタリア人神父によるもう一つの「唱歌」

(第6学年用) 八、我は海の子 一、 我は海の子、白波の さわぐいそべの松原に、 煙たなびくとまやこそ、 我がなつかしき住家なれ。 二、 生まれてしほに浴して、 浪を子守の歌と聞き、 千里寄せる海の氣を 吸ひてわらべとなりけり。 三、 高く鼻つくいその香に、 不斷の鼻のかをりあり。 なぎさの松に吹く風を、 いみじき樂と我は聞く。 四、 丈餘のろ・かい操りて、 行手定めぬ浪まくら、 百尋・千尋海の底、 遊びなれたる庭廣し。 五、 幾年ここにきたへたる 鐵より堅きかひなあり。 吹く潮風に黒みたる はだは赤銅さながらに。 六、 浪にただよふ永山も、 來らば來れ、恐れんや。 海まき上ぐるたつまきも、 起らば起れ、驚かじ。 七、 いで、大船を乗出して、 我は拾はん、海の富。 いで、軍艦に乗組みて、 我は護らん、海の國	われは海の子 われはうみのこ しらなみの さわぐいそべの まつばらに かすみたなびく とまやこそ われがなつかしく すみななれ いで たいげんをのりだして われはひろわん うみのとみ いで ぐんかんのにのりくみて われらはまもらん うみのく に！
---	--

尋) 変ホ長調、7番まである長大な楽曲。「唱歌」として長年親しまれてきたが、文語の程度が高い為か、最近の教科書には掲載されなくなったという。
 チ) 二短調→二長調。8分の6拍子で流れるように進み、前半、後半で調が変わるが、短めの楽曲である。

4. 結びに

今回、チマッティ神父の子ども向け歌曲への取組みを調べる中で、当時、チマッティ神父が音楽を通じて日本人と、とりわけ多くの子ども達と触れあい、どれだけ受容されてきたかを知った。今日の日本の子ども向け音楽の成り立ちの中で、改めてこの一人の西洋人音楽家であるチマッティ神父の存在を認識することは、意味があると考えられる。

我が国における保育カリキュラムは、短期大学における2年間、大学における4年間を中心に、講義科目、演習科目や実習といったスキルを広範

に修めることになっているが、今回取り上げたような知識の拡充をすることも必要である。筆者は今後も同じテーマでの研究を続けていきたいと考えている。

【参考①】チマッティ神父による「尋常小学国語読本」から作られた31の楽曲

*）チマッティ資料館に所蔵されている楽曲の通し番号

巻	曲名	通し番号*
巻一	サルとかに	759
	デンデンムシムシ	726
巻二	菊の花	681
	夕やけこやけ	769
	木の葉	697
	雪	736
	飛行機	626・627
巻三	うちの子猫	702
	ねんねん ころりよ	738・739
	兄弟	700
	仕事なされよ 富士の山	937 733
巻四	むぎ蒔き	760
	やまびこ	690・691
	いろはにほへと	629
	しいの木 かしの実 春が来た	703 688・689
巻五	大日本	707
	私のうち	732
	虹 一足一足	635 643
巻六	なぎ	641
	冬の夜	744
	からまつ 記念の木	724
巻七	松風 初夏のよる	777
巻八	雪解け道	737
	水の力	695
	廣瀬中佐	676
巻九	—	—
巻十	—	—
巻十一	遠足 鳴くひばり	673・751
	われら海の子	761
巻十二	明治天皇御製	661

【参考②】

ここでは、現在の保育現場でも頻繁に歌われている「かたつむり」のチマッティ神父版である「デンデンムシムシ」と、神父自身の演奏によってコ

ンサートで度々披露されていたという「富士の山」、「うちの子ねこ」の楽譜をメロディーパートのみ載せておく（前述のように、曲によっては伴奏が非常に凝ったものも多いが、この3曲に関しては歌いやすいシンプルな伴奏が施されている）。

デンデンムシムシ

チマツティ

Allegretto

デン デンム シム シカ ツム リカ ツム リ
 ア タ マ ガ アルカ メ ガ アルカ ツ ノ ダ セ ヤ リ ダ セ
 メ ダ マ ダ セ

富士の山

チマツティ

あ た ま を た か の く そ び え に だ し う し か ほ う だ
 の や ま を み お ろ し て ニ か み な り の す ま を ニ か す み の す
 ま を ニ し お た に く き く ふーじ は にっ
 ぼんいちのやまー まー

うちの子ねこ

チマツティ

Allegretto moder.

う ち の こ ね こ は か は い い こ ね こ く び
 の こ す ず を ち り ち り ち り ち り ち り な ら し す そ に か ら ま
 り た も と に す が る う ち の こ ね こ は か は い い こ ね
 こ く び の こ す ず を ち り ち り ち り ち り ち り な ら し ま り
 と ざ れ て は え ん か ら お ち る う ち の こ ね こ
 は か は い い こ ね こ く び の こ す ず を ち り ち り ち り
 ち り ち り な ら し

【参考文献】

- 1)「ほほえみ、慈愛と祈りの人 チマツチ神父」A・クレバコーレ著、ドン・ボスコ社 (1981)
- 2)「チマツティ神父 日本を愛した宣教師」テレビオ・ボスコ著、ガエタノ・コンプリ編訳、チマツティ資料館 (2001)
- 3)「チマツティ神父－本人が書かなかった自叙伝上」ガエタノ・コンプリ編訳、ドン・ボスコ社 (2011)
- 4)「チマツティ神父－本人が書かなかった自叙伝下」ガエタノ・コンプリ編訳、ドン・ボスコ社 (2013)
- 5)「チマツティ神父の手紙1」ガエタノ・コンプリ編訳、ドン・ボスコ社 (2003)
- 6)「チマツティ神父の手紙2」ガエタノ・コンプリ編訳、ドン・ボスコ社 (2003)

イタリア人神父によるもう一つの「唱歌」

- り編訳、ドン・ボスコ社 (2004) ^{xvii} 前掲書 (注 16)、p.330-331
- 7) 「チマッティ神父の手紙 3」ガエタノ・コンプリ編訳、ドン・ボスコ社 (2005) ^{xviii} 前掲書 (注 1)、p.121
- 8) 「チマッティ神父の手紙 4」ガエタノ・コンプリ編訳、ドン・ボスコ社 (2006) ^{xix} 前掲書 (注 6)、p.170-171
- 9) 「尋常小學 國語讀本 卷一 ~ 卷十二」文部省 (1918-1932)
- 10) CD 「チマッティ神父 その声 そのころ」ガエタノ・コンプリ監修、チマッティ資料館、ドン・ボスコ社 (2001)
- 11) 「新訂尋常小學唱歌 (復刻版)」文部省、日本音楽教育センター (1995)

【注】

- ⁱ 「ほほえみ、慈愛と祈りの人 チマッチ神父」
A. クレバコーレ、p.11、ドン・ボスコ社
- ⁱⁱ 「チマッティ神父 日本を愛した宣教師」テレジオ・ボスコ、p.9、ドン・ボスコ社
- ⁱⁱⁱ 前掲書 (注 2)、p.10
- ^{iv} 前掲書 (注 2)、p.15
- ^v 前掲書 (注 2)、p.21
- ^{vi} 「チマッティ神父の手紙 1—日本との出会い—」
p.23、ドン・ボスコ社
- ^{vii} 前掲書 (注 1)、p.65
- ^{viii} 前掲書 (注 1)、p.122
- ^{ix} 日本人が作曲した最初の三幕物で大規模なオペラと言われている山田耕筰のオペラ「黒船 (夜明け)」の初演は 1940 年 11 月である。
- ^x 前掲書 (注 6)、p.80
- ^{xi} 前掲書 (注 6)、p.94
- ^{xii} 前掲書 (注 1)、p.121
- ^{xiii} 前掲書 (注 2)、p.28
- ^{xiv} 前掲書 (注 2)、p.29
- ^{xv} 前掲書 (注 1)、p.121
- ^{xvi} 「チマッティ神父の手紙 2—主任司祭の心—」
p.191、ドン・ボスコ社

Another “SHOUKA” by an Italian priest

Hiromi AKAI

【abstract】

Nowadays, Children’s songs and “SHOUKA” have still been well used for child education in Japan. “Jinjo-Shougaku-SHOUKA”, which had been collected and arranged by Ministry of Education from late Meiji period, is one of the most famous songs and it is still used for child education.

An Italian priest Vincenzo Cimatti had also made many “SHOUKA” from “Jinjo-Shougaku-Kokugo-Tokuhon”, which was the same source of “Jinjo-Shougaku-SHOUKA”. He loved Japan so much, and he desired to have strong relationship with Japanese children to propagate Christianity. He made many songs such as “FUJISAN” and “KATATSUMURI”, whose titles are same as those of “Jinjo-Shougaku-SHOUKA”. Children had sung such songs with him and felt happy. They had felt close to him.

Many Japanese colleges or universities may not introduce above history through the curriculum for child education. Although, to let have interest in such historical fact will be important for us in order to expand our level or skills of child education.

【key words】

Children’s songs, “SHOUKA”, Vincenzo Cimatti